

◆ かつば民話シリーズ③ ◆

相模の河童漬け

さがみのかっぱづけ



作:近藤せいけん

相模の国の大河相模川のながれる三田村に近くの河原に「太郎河童」という一ぴきの河童が住んでいました。

たった一ぴきで仲間がいません。

「ああ～、一ぴきは寂しいなあ」

「仲間が欲しい、誰かこないかなあ」

「一ぴきじゃ、寂しくて生きていけない」

「ああ、仲間がほしいなあ」

大堰（おおぜき）の上のいつものダイコン畑にながながと横になり、じっと秋の空をぼんやりながめていました。

そうして悠悠とそびえる、霊峰大山を見るときもなしにぼんやり見ていました。

「そうだ！大山の天狗様をお願いしよう」

「大山の天狗様であれば願いをかなえてくれる」

「きつとかなえくれる」

太郎河童は中州に座り直し、霊峰大山に向かい手を合わせ真剣に祈りつづけました。

しばらくすると、沈みゆく夕日の中一筋の黄金の光が座りつづける中州の太郎河童に向かって、さしこんできました。

太郎河童は目を閉じて熱心に祈りつづけているため、気づきません。

太郎河童のまわりが急に黄金に輝き始め、明るく、まぶしく輝き始めました。

それでも太郎河童は気づきません。すると突然大きな割れんばかりの音がしました。

「太郎河童！これ太郎河童、目をあけよ！」

大きな声に驚いて、太郎河童が、おそろおそろ、目を開けました。

「わあ～まぶしい！まぶしすぎて何も見えない」

「目がパチパチして何も見えない」

「太郎河童。上を見よ！」

「え、上ですか？」

声をするほうを見た。黄金に輝く光が引いていき、そこには大きな赤色の形をした物が見えた。

「太郎河童、おぬしがわしを呼んだ。」

「もしや、大山の天狗様でございますか」

「そうじゃ、わしが大山の天狗じゃ」

「ははあ～。おそれいります」

「さて、わしに何ようか？」

「話をしてみよ」



太郎河童はこれまでのいきさつを話し、一ぴきがどんなに寂しいか、悲しいか、不安か話した。天狗様は上空にとどまり、じっと、河童の話を聞いていた。

「それで、おぬしは河童仲間をよびたいとなあ、ん…ん」

「そうか、その願い、聞きとどけよう」

「それで、河童仲間は日本のどこにおるのじゃ？」

「はい、私ども河童は河童語と、独自の通信があります」

「よんでいただきたいのは、数十箇所がざいます」

「そんなにいるのか？」

「もう少し、しほれないか」

「はあ～そうですか。それだは数箇所にしほります」

「それでは御言葉にあまえまして、まず遠野のかつば、五島列島の（ガータロー）、島根の日野川のかつば、筑前若松のかつば、をお願いいたします。」

「さようか。よし！あい解った。」

「おぬしの檄文はどうする？」

「ひょうたんに、わしのかつば語を入れ届けてください」

「ひょうたんにかつば語をいれるとなあ。わはは、わはは！ゆかい、ゆかい」

天狗様が高らかに笑いました。

「天狗様がおいきになるのですか？」

「わしはいかぬ」

「えっ、どなたがいかれますか？」

「太郎河童、後ろをみよ！」

「え、なんですか？」

中州に生えている木の上に一羽の大きなワシが音も無く止まっていた。

「わしの使いじゃ」

「は、は、は ワシ殿が運んでくれるのですか」

「ぜひ、お願いいたしますじゃ」

天狗様は「じろり」と太郎河童をにらんだ。

「ところで、太郎河童、おぬしはわしに何をしてくれるのか」

「え、え？何といわれましても。どうしようか・・・何もないし・・・」

「そうだ！天狗様、わしが漬けた旬の野菜があります、それを召し上がってください」

「旬の野菜の漬物とな」

「どれ、出してみろ」

「今に時期は白菜の漬物が、一番おいしゅうございます。」

天狗様は白菜づけを、「ぱりぱちり」と食べた。

「う〜う、もっと他のものはないか？」

「それでは、なすづけでございます。」

天狗様は茄子づけを「ぎゅぎゅ」と食べた。

「う〜う、もっと他のものはないか？」

「それでは、胡瓜づけでございます。」

天狗様は胡瓜づけを「きゅ、きゅ」と食べた。

「う〜う、もっと他のものはないか？」

「それでは、かぶづけでございます。」

天狗様はかぶづけを「かぶ、かぶ」と食べた。

「う〜う、もっと他のものはないか？」

「それでは、瓜づけでございます。」

天狗様は瓜を「うり、うり」と食べた。

「う〜う、もっと他のものはないか？」

天狗様はらっきょを「らっきょ、らっきょ」と食べた。

「う〜う、もっと他のものはないか？」

「それでは、だいこんでございます。」

天狗様はだいこんを「でいこん、でいこん」と食べた。

すこし、間をおいて、天狗様が大きな声で。

「太郎河童、美味であった。美味、美味」

「おぬしの願い聞きとどける！」

「これがのち、人と和し、この相模に住まう人達にこの漬物を広めよ！」

「相模のかっぱ漬けと名づけ、長く、後世に伝えよ、さらばじゃ」

大山の天狗様はけむりと共に消えた。そこには、天狗様のお使いワシと相模の河童太郎が、暮れ行く秋風の中にいた。

(終わり)